

野
ば
ら

日本現代詩歌文学館復刻シリーズ第1輯

豊田玉萩 著 新体詩「野ばら」復刻版

発 行 日 平成2年5月18日

編集・発行 日本現代詩歌文学館

〒024 岩手県北上市本石町二丁目5番60号

T E L 0197-65-1728

印刷・製本 株式会社 モノグラム社

〒024 岩手県北上市諏訪町一丁目3番21号

T E L 0197-63-3271(代)

野ばら

新春賦

豊田玉萩作

今日の光榮現しつゝも
朝の大神出でまし給ふ
其壯嚴のあら尊しや。

天津雲間の御座をはかれ

玉の階燦爛として
静かに渡る初日の御神。

空に金扇彩羽をひろげ
東海遙か明け行く波に
黄金花咲く太平洋上。

七色玻璃の小簾たれつゝも
八重の潮路に輝く日影
常夜開けてあめ地清し。

この新しき春あさばらけ
鶏は勇みて希望の聲に
凱歌あぐる我大八洲。

初 春 曲

むすぶ氷もとけそめて
開く眞白き雪のまゝ。

髪はみだれし青柳の
糸よとけよと雨の音。

胡蝶の舞の美しく
それにともかふ花の笑。

遠くつゞみの音するは
霞にひびく野べの風。

よする新潮たのづから
唄ふ乙女の春の曲。

夢中の花

夢の中より花薔薇の
香はこもりけんあかつきの
袖に異ならぬ心地して
もらす笑顔も匂ふかな。

昨夜の夢の女神こそ
胸に秘めたる思ひねの

枕まくらの上の花はな薔は薇らよ
その香かは今も残のこりつゝ。

あゝ香かはふかしねざめては
袖そでにうつゝの薔は薇らの花

さればよ夢は夢ならぬ
清きよき笑わまひのうつるらん。

くしき女め神がみの袖そでかろく
影かげさへ清きよきうつり香かの
夢ゆめよさめざれかくてこそ
我われは若わかきにかへるなり。

白き羽袖の我頬に
ふるゝと見れば夢さめて
薔薇はかはらぬ花の香を
枕の風に送るなり。

春夜の 小川

梅の香りもたぼる夜や
空をつゝめる雲の袖
夜半の小川の静かにて
夢かど許り水の音。

都^{みやこ}の塵^{ちり}にほご遠^{とほ}き
我^{わが}家の^やほとり夜^{よる}は尙^{なほ}
ひとしほ清^うし水^{みづ}の音^{おと}。

星^{ほし}と見^みわしは宵^{よひ}やみに
香^かの^かみこぼるゝ花^{はな}の影^{かげ}
我^{わが}園^{その}かからゆかしくて
よればそゝろに酔^よひ心^{こころ}。

時^{とき}をも忘^{わす}れ身^みも忘れ
梅^{うめ}の木^こ蔭^{かげ}に佇^{たふ}むめば
眠^{ねむ}りさそふや水の音^{おと}。

憂も惱みも我胸を
さりて静けき此の夜半に
うつゝ心の花の香や
月はおぼろに水清し。

落 紅 怨

一度無常の風吹かば
やがて果敢なく散る花を
眺めてなにを樂しまん
惜みて何をかあしまん。

浮世の人はとことはの
花こそあれと願へども
あゝとことばに散らざらば
詩人のなみだなかるらん。

世は哀樂の宿あれば
咲きて散るなる花の旅
時は涙の道しるべ
かげきは花の生命かも。

花はなげきを生命にて
墓場の上に涙あり

散^ちり行く花を惜^{をし}みても
流^{なが}るゝ水^{みづ}はかぎりあし。

春^{はる}をうづむるおくつきの

梢^{こぎる}さびしく吹^ふく風^{かぜ}に

花^{はな}の行^ゆくへの後^{あと}とへば

恨^{うら}みは更^{さら}につきざらん。

一^{ひと}度^{たび}無^む情^{じやう}の風^{かぜ}吹^ふかば

やがて果^は敢^かなく散^ちる花^{はな}を

眺^{なが}めて何^{なに}をたのしまん

惜^{をし}みて何^{なに}をかなしまん。

江上暮春

波も色めく隅田川
木ぐれにすさぶ笛の聲
春やいづれと怨みわび
調ほそるよ夕まぐれ。

あゝ佐保姫の袖ひちて
雨にくれ行く柳かげ
隅田の流れくれなるの
岸をいろざる花の波。

みどりの木蔭さまよひて
少時笛の音きゝぬれば
悲しやなれも佐保姫の
去ぬを恨みのすさびかや。

風のいたみにたへかねて
静かに沈むさほ姫の
流れ行くへを見渡して
獨り思ひにふくるかな。

遠くあり行く笛の音も
花も匂ひもいつしかに

消^きへてそゞろに流^{なが}れつゝ
空^{むな}しく青^{あを}し隅^{すみ}田^た川^{がは}。

夢うつつゝ

舞^まふにも輕^てき蝶^ての羽^はの
明^あ日は嵐^{あらし}にもまれなん
夕^{ゆふ}ぐれ花^{はな}の散^ちり逝^ゆきて
盛^{さか}りの春^{はる}も今^{いま}しばし。

鳴^あ呼^こ青春^{せいしゅん}の報^{むく}いには
なさけの露^{つゆ}の美^う酒^{さけ}に

醉^さへる胡蝶^{こてふ}の夢^{ゆめ}如何^{いか}に
花^{はな}散^ちり逝^ゆかばさめはてん。

もろき浮世^{うきよ}をかこちつゝ
光^{ひかり}りにあはで静^{しず}やかに
散^ちり行く花^{はな}はかたらねど
色^{いろ}に憂^{うれ}ひのこゝろあり。

咲^さくもどきの間^ま散^ちり逝^ゆくも
また一瞬^{いつしゆん}の夢^{ゆめ}の世^よや
うつゝにかへる花^{はな}の春^{はる}
忍^{しの}ぶは獨^{ひとり}り蝶^{てふ}の影^{かげ}。

行く春

嗚呼三光の樂しみの
夢まださめぬ春の暮
水にたくられ逝く花の
別れに深き憂ひあり。

空しき山を眺めては
花の姿を忍べども
流るゝ水は情無く
浅き深きのけぢめなし。